控えめながらも、いつも明るい色で微笑んでいる。そんな彼女が、私と二人の時にだけ見せる素の表情に、私はただただ、想いを寄せてあげることしか出来ないのだ。

[A 面：彼女には憂いがある。]

私の大好きな親友は、私の大好きな兄の、元恋人である。

元、というのは、兄が既に他界している為だ。
それはそれは唐突で、大好きな兄がこの世からいなくなったという事実に、当時は「心に穴が開いたような」という表現は的確な表現だったのだなとさめざめ悲しみに暮れたものだ。彼女の話に入る前には長くなりすぎるので割愛するが。
それで、私の大好きな親友の話である。
私の大好きな親友は、私が見える範囲では、妹という立場に配慮したのか兄とべったべたな甘いラブラブはしていなかったように見えた。それでも、兄のことをとても好きだと思ってくれているのは確かで、そんな二人の空気が私はとても好きだったのだ。兄がこの世から去って、彼女も、しばらくは私と同じに、茫然とする心を抱えながら過ごしているのが目に見えて痛々しいものだった。
尤も、そうして彼女が一緒に悲しみを抱えてくれたからこそ、私は兄の死を引き摺りすぎずに済んだのだった。

しかし、彼女は。

「見て弥桜、此処、晴臣が気にしてたお店だわ」
彼女が雑誌のページを指差す。
二年程前に出来た喫茶店だっただろうか、最近その新メニューが女性客の人気を呼び、よく取り上げられているようだった。……とはいえ、兄が言っていたとなると、出来たばかりの頃のことだろうか。

「……そうなんだね。兄さん、何て？」
……「何て『言ってたの？』」、と、彼女に対して自分が過去形を使うのは、いつも酷く躊躇われる。気付いたのは、割と早かった。自分の過去形と、彼女の過去形は、――その期間が違いすぎるのだと。
そう、まるで、彼女の中の兄は……未だ一緒に生きているかのようで。

「可笑しいの。私が『だったら弥桜を誘って行く』と言ったら、『俺が言ったのに』と拗ねていたのよ、でもこういうお店なら私は晴臣よりも弥桜と行く方が絶対楽しいもの、仕方無いじゃない？」
ねぇ？と、悪戯っぽく笑う。二年前の思い出を辿っているのか、それとも。

と、そう思った次に。
「……仕方無いじゃない、ねぇ？」
同じ言葉、でもそれは……それまでの声音と丸っきり違う、まるで、不意に現実に戻されたかのような。

彼女の表情を伺う。いつも微笑んでいる彼女の、不意に溢れてしまった憂いに、そっと俯く。その手だけはぎゅっと握って――どうか、と祈るように想いを寄せて。

「私がいいなんて嬉しいな。一緒に、行こうね」
「……うん、」
二人でじゃない、紗璃の中の兄さんも一緒に。行こうね。

正しく届いた意図に、彼女がそっと目を伏せたことが、小さな救いだった。

＊